

二〇一九年五月二四日

初生りの胡瓜根性曲りをり
夏空へ切妻屋根の連なりぬ
波飛沫浴びて遊覧船涼し

董 雨
せいじ
智恵子

二〇一九年五月二三日

源流の森に群生著莪の花
十葉の群落廃坑隠すほど
持て余すかちんかちんの氷菓かな
迷ひなく鉄を入るる雨後の薔薇
亡き夫の恋文ならめ落し文

愛 正
智恵子
なつき
さつき
はく子

二〇一九年五月二二日

新茶揉む老婆の皺の手窪かな
摺り足で闇に踏み入る螢狩
溪流の楽に和すごとと遠河鹿
代田いま入江のごとく広ごりぬ
膝ついて傳くごとく薔薇手入れ

愛 正
素 秀
隆 松
せいじ
菜 々

二〇一九年五月二二日

谷戸広し代田に青天井展け
雨晴れてさ緑深きお茶畑
雨粒の珠を宿して薔薇真紅
ジヨギングの影が縫ひゆく夏木立

せいじ
やよい
満 天
さつき

二〇一九年五月二〇日

野辺草の風の波間に石仏
緑風や真白き馬柵に凭るれば
和太鼓の打ち揃ひたる五月晴

たかを
こすもす
満 天

二〇一九年五月一九日

堂涼し阿弥陀の前に朱印受く
溪谷の茶屋に一服河鹿鳴く

なつき
智恵子

二〇一九年五月一八日

一村に水匂ひ立つ植田風
五月雨のオランダ坂をたもとほり
百礫の緑さす途に石仏

うつぎ
やよい
ぽんこ

毎日句会みのる選・二〇一九年五月二六日